

大通公園を望む窓辺から

不適切にもほどがある！

常任理事 山科 賢児

連続テレビドラマ「不適切にもほどがある！」(2024年3月現在放送中)が面白い。心優しい「昭和のダメおやじ」が、ひよんなことからバブルが始まった1986年(昭和61年)から2024年(令和6年)へとタイムスリップする設定である。ドラマでは、スパルタ体育教師の歯に衣着せぬ「不適切」発言や行動が、令和の淀んだ息苦しい空気をかき回し、昭和の「当たり前」が令和では「不適切」のギャップがテンポよくミュージカルを交えて描かれている。

昭和は、バスなどの公共交通機関や飛行機内で普通にたばこを吸い、学校のクラブ活動では「しごき」やうさぎ跳び、水飲み禁止が疑問なく行われ、性的にきわどい内容のテレビ番組を誰でも観られ、今では考えられない時代であった。それが一転して、昭和では当たり前であった常識が現代の令和では「不適切」のレッテルを貼られてしまう。昭和の配慮に欠けた「自由と無責任」の反動なのか、令和は周囲に顔色を窺いながらビクビク行動しなければならないコンプライアンス過剰反応の時代となってしまった。

第1話の「頑張れって言っちゃダメですか？」では、「頑張るってね」と声を掛けてパワーハラスメントとされる場面で、「頑張れ！」と言って何がいけないのかと、行き過ぎたコンプライアンスを揶揄する。人と人が向かい合って思いを伝え合うことに躊躇してしまう時代の風潮を「気持ち悪い」と一蹴し、多様性を謳いながら実際には個人を尊重しない日本の社会の実態をあぶり出している。第2話の「一人で抱えちゃダメですか？」では、『働き方って「がむしゃら」と「馬車馬」以外にあるのかね?』と喝破し、令和は協調性の名のもとに「出る杭は打たれる」世界になったと皮肉る。「働き方くらいは自分で決める」と言い切るのは爽快である。

このドラマは、昭和を決して礼賛懐かしんではない。同調圧力に屈して窮屈で臆病になりがちな令和の人間に、昭和の視点を通して「今の世の中って何かおかしくない?これでいいの?」と気づき考えるきっかけを与えると共に、昭和から平成・令和へと世代を超えた「家族の絆」を描く物語となっている。

高齢化時代の医療DX ～現在と未来～

理事 たきやま よしゆき
滝山 義之

令和6年3月2日、3日、両日に日本医師会館で行われた医療情報システム協議会に参加しました。基調講演で日本医師会の長島常任理事が少子高齢化の時代を迎えるにあたって、医療DX、医療のICT化の推進により実現すべき医療分野の変革として、業務の効率化や適切な情報連携などを進めることで、より安全で質の高い医療を提供するとともに、医療現場の負担を減少させることが目標と述べられました。協議会の初日の午後より、5人の厚労省の担当官から現状報告と今後の目標が報告されました。もっとも基礎となるオンライン資格確認の導入は義務化対象施設の98%で準備完了となり、運用開始施設は96.3%でなされています。またマイナンバーカードの申請交付は77.8%され、健康保険証は73.8%に交付されています。

しかし、本年1月分のオンライン資格確認は実績では病院で11%、医科診療所では5%にとどまっています。電子処方箋はオンライン資格確認等システムを拡張し、処方箋を電子的に発行し、患者が直近処方や調剤された内容の閲覧、重複投薬等をチェックの結果確認を可能にすることができるとされています。実際運用されているのは本年の2月で利用申請済み病院でも2.2%、医科診療所では3.9%にとどまっています。導入が進まない要因は、対応薬局が少ない、手間がかかる、などのほかに対応可能なシステムベンダーが全国で33件と少ないことも原因にあるようです。オンライン資格確認、電子処方箋を見ても、医療者にとって、操作が煩雑で省力化の効果もなく、患者にとっての利点もあまりないようです。しかし、国が2024年にも予定している、全国医療情報プラットフォームの構築や標準型電子カルテの開発は、人口減少期にある日本には必要なものであり、国には、導入にあたり医療機関に負担がかからないような対策を望みます。

